

## 『マルタ騎士団』論

— フリードリヒ・シラーにおける「男同士の愛」 —

菅 利 恵

**要旨：**断片に終わったシラーの戯曲『マルタ騎士団』では、ともに戦う騎士たちによる恋愛が描かれている。シラーによってこの愛は作品の要としての位置づけが与えられているにもかかわらず、従来の研究においてこのモチーフは軽視されてきた。シラーはこの作品以外でも男性同士の情熱的な友愛をしばしば描いている。本稿では、まずシラーの作品一般において「男同士の愛」が持った意義を探り、そのうえで、『マルタ騎士団』の中で騎士同士の恋愛がどのような機能を果たしているかを明らかにする。

愛をめぐるシラーの言説は、啓蒙時代の「文芸公共圏」に見られた構造に刻印されている。すなわち、私的な「愛」のなかに「自由と平等」という市民的なイデオロギーを込め、この「愛」の言説を市民的な自己主張の基盤にする、という構造である。男同士の友情は、さまざまな愛の関係性の中でも市民的なイデオロギーをもっとも純粋に追究できるものであり、だからこそシラーはこのモチーフを繰り返し描いたのだと思われる。

『マルタ騎士団』は、「普遍的人間的なもの」の理念とその内実たる「自由と平等」の観念を、「犠牲的英雄イズム」のドラマを通して顕現させる、という矛盾に満ちた課題を試みた作品である。この試みにおいて、シラーは「犠牲」を強制や権力から完全に「自由な」行為として描こうとした。男同士の恋愛のモチーフも、結局は実らなかったこの試みに取り組む中でこそ浮上したのだと思われる。すなわちここでは男同士の愛が、集団への自発的な自己溶解をうながすための動力として機能しているのである。

シラーにおける男同士の愛は、あくまでも自由な関係性であるからこそ、「自由と平等」を掲げる空間のなかに、「支配と隷属」の構造が入り込むことをゆるす契機ともなっている。シラーによる「人間的な」犠牲のドラマの試みは、理想主義的な男同士の関係性をめぐる逆説を明らかにしている。

## はじめに

シラー Friedrich Schiller (1759–1805) が戯曲『マルタ騎士団 *Die Malteser*』<sup>(1)</sup> に着手したのは1788年のことである。『ドン・カルロス』(1787) 執筆のために読んだ『スペイン王フェリペ二世時代の歴史』に着想をえて、この題材に取り組みはじめた。その後1804年までいくども書き直し、結局1805年完成させることのないまま世を去っている。<sup>(2)</sup>

作品の舞台は一六世紀半ばのマルタ島。マルタ騎士団によるトルコの海軍からの防衛戦を題材としている。作者はこれを書きはじめたころ、史実をもとに古典的かつ理想主義的な悲劇を書こうとしていて、マルタ騎士団はそうした試みのために選ばれた最初の素材だった。この場合古典的というのはギリシア悲劇への理念的な回帰を意味しており、簡素な筋書きと様式化された人物像、そして合唱を組み込んだ形式をとおして、単純かつ力強く生を表現しようとする

ものである。<sup>(3)</sup>

簡素化と様式化を通して生の基本問題を浮き彫りにする——この試みにおいてシラーは、ひとつの特別な愛のかたちに光をあてた。それはともに戦う騎士たちによる「男同士の愛」である。断片に終わっているために具体的な描写は少ないものの、シラーはこの愛を「性愛のすべの兆候を備えた」ものとして構想した。そしてこれを「女性に対する愛の完全に有効な代用品」ととらえ、「影響においてはこれを凌駕する」ものと位置づけたのだった。(173)

シラーがどの作品よりも長きにわたって取り組んでいたにもかかわらず、『マルタ騎士団』についての研究は少ない。まれにあつかわれても、「男同士の愛」が持つ意味については軽視されてきた。<sup>(4)</sup> けれども、シラーがこの作品の中であえて男性同士の恋愛を描こうとしたのは、たんなる偶然ではなかったように思われる。以下では「男同士の愛」をめぐる時代背景を考慮しながら、この愛が『マルタの騎士団』のなかでどのような機能を果たし、またどのような問題を提起しているのか、明らかにしてみたい。

## 1. シラーにおける友情礼賛とその時代背景

### 1.1

まず、シラーの言説のなかで一般に男同士の愛が持った意味を探ることからはじめよう。

『マルタ騎士団』のように「恋愛」として位置づけられていなくても、彼の作品では男たちの熱い情愛がよく主題化されている。そこにはあるひとつの構図が繰り返し見られる。それは、固い絆で結ばれたふたりの若者のかたわらで、男性の権力者が彼らをうらやましげにながめているというものだ。

たとえば1787年に発表された悲劇『ドン・カルロス』。舞台は専制君主フェリペ二世統治下のスペインである。王が絶大な権勢をほこり、侵略した土地の民を苦しめて抑圧的な支配体制を敷くなか、より人間的な世界を求めて命をかける闘士として、ポーザ侯爵という青年が登場する。フェリペ王は、政治的な立場をまったく異にするこの男になぜか押さえがたい魅力を感じ、彼と友情で結ばれることを切望するようになる。けれどもポーザはそんな王の思いにまったく応じなかった。彼は王と確執を持つ王の一人息子、カルロス王子の方に深い友情を捧げており、王子への無私な愛こそを、その政治的な情熱の源としていたのだった。カルロスの継母にあたる王妃とカルロスとの仲に王が疑いの目を向けたとき、ポーザはこれをそらすために、あたかも自分が王妃と通じているかのような細工を図る。王はこれをまにうけて、ポーザに裏切られたと思ひ込み、彼をひと思いに殺してしまう。

絶対的な権力者として君臨するフェリペ王にとって、自分に背く人間を抹殺するなどわけもないことだった。しかしその彼の力をもってしても、ポーザの心は意のままにならなかったのである。カルロス王子は、ポーザを王に殺されて逆上したとき、父王にこんな言葉を投げつける。

わたしを救わんがために、かれは死を求め死を遂げたのです。あなたはかれを重用なさったが——かれはわたしのために死んだのです。あなたはかれに愛と友情を押し付けたが、あなたの王笏はかれのおもちゃにすぎなかったのだ。かれはそれを投げ捨てて、わたしのために死んだのです！<sup>(5)</sup>

ここでカルロス王子は、父王に対して、自分とポーザとの仲を見せつけるかのようにふるまっている。それによって自分たちの友情の絆を、父王の権力とは無関係に存在する、神聖かつ至高のものとして際立たせているのだ。窮地に立たされながら誇らしげでさえある息子に、父王はなにも言い返せない。その姿は、絶対的であったはずの彼の権力の虚しさと、彼が体現する封建的な支配構造そのものの空虚さを、くっきりと浮かび上がらせている。

もうひとつ、『人質』(1798)という作品を見てみよう。これは太宰治の『走れメロス』の原作ともなったバラードである。

主人公のダーモンは、反逆罪で暴君ディオニュースに捕らえられ死刑を宣告される。しかし彼は妹を結婚させるために三日自由にしてほしいと王に頼み、そのかわりに友ピンチアースを人質として置いてゆくという。王はこの懇願を聞くと皮肉な笑みを浮かべて、帰って来なければおまえの命は助かるぞ、とそそのかすように言いながら彼の願いを受け入れる。

結婚式が終わって帰路についたダーモンは幾多の困難に見舞われる。激しい豪雨のなか川をわたり、盗賊たちを追っ払い、灼熱の太陽に焼かれてながらも立ち上がり、やっとのことで城門に帰りつくと、友ピンチアースが今にも処刑される場所だった。ダーモンの姿をみとめた家臣は、もう間に合わないから逃げるようにとせき立てる。けれどもダーモンはきっぱりとこう言う。

友が友に誓いを破ったと  
残忍な暴君に言わせてはならぬ  
彼は二人をともに殺して  
愛と誠がこの世にあることを知るがいい<sup>(6)</sup>

そうして群衆をかきわけて、こう叫んだのだった。「わたしを殺してくれ。彼が人質となってくれたわたしはここだ!」<sup>(7)</sup> 再会した二人の男は涙にむせびながら固く抱き合う。その光景は暴君の心をも動かさずにはおかなかった。王は言う。

友の信義とはむなしい言葉ではなかった  
わしも仲間に加えてくれ  
わしの願いだ、おんみらの盟約に  
わしも新たな一人になりたい<sup>(8)</sup>

バラードはここで終わっており、男同士の熱い絆に魅了された王の望みがかなえられるのか、それとも『ドン・カルロス』のように失敗に終わるのかは語られていない。たしかなのは、ここでも青年たちの希有な絆が、権力者の恣意ではどうにもならない、しかし権力者をも否応なく惹き付けずにはおかない、特別な光彩を放つものとして際立たせられているということである。

上のふたつの作品ではともに、若者たちが、彼らの間に割り込もうとする暴君に見せつけるかのようにして、ふたりだけの美しい友情物語を繰り広げていた。ダーモンが言うとおり、その姿はなによりもまず「愛と誠」を証明しているのだろう。しかしそれだけではない。暴君を歯牙にもかけない彼らの姿は、「暴君」が体現する封建的なヒエラルヒー秩序そのものが無効であることを、明確に告げている。もっと言うならば、対等な立場で尊重しあう若者たちの姿

は、当時封建的な権力構造に対抗して新たに広められつつあった、「平等」の理念こそを代表しているのだ。権力者を無視してただふたりの絆を深めながら、彼らは、ヒエラルヒー的な秩序意識を否定する「平等」の理念を、誇らしげに具現してみせている。

## 1. 2.

男同士の情熱的な関係性に「平等」な世界への希求が込められる——上に見たようなシラーの作品世界は、啓蒙時代の市民知識層による言説空間に深く根ざしたものであった。

この時代、市民知識層の言説の中では、封建的な秩序関係に対抗しながら「自由と平等」という市民的なイデオロギーを打ち出しつつ、これを道徳書や文学作品などの「文芸公共圏」において表現し広めることがさまざまに試みられていた。そのなかで、市民的なイデオロギーを具体的に表象する「人間的」な関係性の代表としてとりわけよく光を当てられたのが、家族愛や恋愛などの私的な愛の結びつきである。<sup>(9)</sup> 劇作品や道徳書のなかで、親子や恋人同士の愛情関係が感傷的にうたわれて「普遍的人間的なもの」の表象として強調され、同時に愛そのものも、「普遍的人間的なもの」の内実たる「自由と平等」の理念に調和するよう一八世紀を通して組み直されてゆく。たとえばこの時代に家庭劇などを通して広まりはじめた新しい市民家族の像においては、父親と他の家族成員との間に権威主義的な色が薄められて、もっぱら個人間の自発的な愛情が強調された。<sup>(10)</sup> また恋愛についても、性差を前提としつつ、この性差が「自然な」ものとしてとらえなおされることで男女のヒエラルヒー的な秩序が隠蔽され、自由な個人同士の情熱として理想化されたのだった。<sup>(11)</sup> そしてそのように「自由と平等」という市民的なイデオロギーに寄り添い、普遍的人間的なるものとして強調された新しい「愛」の観念を紡ぎ出すことを通してこそ、市民知識層は、自らの価値意識の正しさを広め、その文化的な影響力と発言力を高めようとしたのである。<sup>(12)</sup>

このような、私的な「愛」が市民的な自己主張の糧にされるという構図は、シラーにおける友情礼賛とも深くかかわっている。すなわちこの時代、友情もまた恋愛や家族愛と同じように「自由と平等」を表象しうる「人間的な」関係性の一形態とみなされて、市民知識層の文化戦略のなかで要となる役割を与えられたのだ。<sup>(13)</sup> 一八世紀後半を通して、男同士が細やかな情愛を育み思いのたけを熱い言葉で伝え合う、カルト的な友情礼賛の文化が広められてゆく。新しい関係性の実践として、さまざまな知識人たちが友との親密な交際に励み、感情のこもった言葉で手紙を交わし合った。その際特徴的だったのは、男性たちの親密な感情が、しばしば男女の恋愛を語る言葉をそのまま使って表現されたということである。<sup>(14)</sup> 近代的な精神分析学の発展とともに同性愛が病理化された一九世紀末以降とはちがい、男同士の濃密な情愛におしなべて不審のまなざしをそそぐような風潮は当時まだなかった。男性間の性交渉には宗教的な観点から刑罰が科せられたが、男が男に熱い情熱を向けることそれ自体が異端視されることはなく、「友情」の表現から神経質に官能的なものを取り除くことも、これを「恋愛」と厳格に区別することも、あまり必要ではなかったのである。<sup>(15)</sup>

男同士の関係性をめぐるシラーの言説は、こうした文化的背景ぬきには考えられない。友情のみではなく恋愛などを含めた愛一般にかんしても、シラーの言説は「市民的なイデオロギーの表現媒体としての愛」という一八世紀的な構造に強く刻印されている。たとえば彼の市民悲劇『たくらみと恋』（1783）では、身分違いの恋が許されない現状をはかなんだ女主人公のルイーゼが、来世に思いをはせながら次のように言う。

そのうち、お母さん、そのうち、身分のへだての垣根がとれて、あのいやな階級の殻が飛び散って、人間がみんなおんなじ人間として通れたら。そのときこそ私、純潔というものだけしか持っていないくても、(…) 私お金持ちになれるんだわ。そのときこそ涙が手柄みために、美しい考えが手柄みために評価されるのね。そうなったら、私の身分も高くなるのよ、お母さん。<sup>(16)</sup>

ここでは身分のころもを取り去った裸の個人が「人間」という言葉で言い表され、愛の関係がそうした「人間」どうしの水平な関係性として謳われているのだ。

このように私的な愛をめぐるシラーの言説は、啓蒙時代の言説空間を背景に、市民的な理想主義を強く込めたものであった。彼に独自の点があったとすればそれは、この理想主義を他に見られないほどラディカルかつ純粋なかたちで表出させたということだろう。そしてこのラディカルさを、もっとも極めることのできたモチーフこそが、彼の「男同士の愛」だったと思われる。なぜならこの愛は、一八世紀において、市民的なイデオロギーをどこよりも純粋に追究する関係性だったのだから。男女の恋愛や親子愛の場合、いかにその観念が一八世紀を通して新たに練り上げられ、個人の意志にのみ基づく強制から自由なものとして定義しなおされたとはいっても、「男女」と「親子」という観念の中に、実質的なヒエラルヒー構造を残していたことは否定しがたい事実である。それに対して男同士の愛ならば、同等な人間どうしの自由な関係性という理念をそのまま重ねることができる。じっさい当時つむがれた友情の観念においては、「平等」ないしは同等の人間の結びつきということにこそ、この関係性の本質があると見なされていた。<sup>(17)</sup> たとえばカントも『人倫の形而上学』(1797)の中で友情を「相互的で同等な愛と敬意をもって二人の人間が結びつくこと」と定義し、あくまでも平等な人間同士の関係性という点で、友情は家族愛と本質的に異なるとしている。<sup>(18)</sup> その一方で当時、父子の関係を「友だち」と表現することも流行したのだが<sup>(19)</sup>、この場合「友情」や「友人」という言葉は非権威主義的な水平関係の比喩にほかならず、この言葉によって、親子関係のはらむ実質的な権力構造を覆い隠すことが試みられたのだった。

「水平」な関係性の表象たる「友情」に、シラーはさまざまな愛のなかでも特別の位置を与えた。先に見た『ドン・カルロス』では、ポーザとカルロス王子の友情物語と並行してカルロスと王妃との禁じられた恋の物語が展開するのだが、このふたつの愛の物語はやがて男同士の愛の物語へと集束してゆく。終盤でポーザが命を落とすと、カルロスはまるで憑き物がおちたかのように王妃への恋慕から卒業し、恋にきっぱりと背を向けて人類愛の実現という友の夢を自ら生きる決意をかためるのだ。ここでは明らかに、男女の恋よりも男同士の絆が選びとられている。

シラーの晩年の代表作『ヴィルヘルム・テル』(1804)でも、男同士の愛が男女のそれに優先されている場面がある。オーストリア代官の横暴に対するスイスの民の抵抗を描いたこの作品で、よく知られているのはリング射ちのシーンでクライマックスをむかえるテルと代官との確執だろう。しかしここで目を向けたいのは、テルを取り巻く人間模様に織り込まれた、ルーデンツという若いスイスの貴族をめぐるエピソードである。彼はオーストリア貴族の娘ベルタとの敵味方を超えた恋を育てていた。スイスの民が祖国の自由を守るために立ち上がったとき、二人は貴族でありながらも民と連帯し同志として戦おうとするのだが、そのなかでベルタは卑劣な代官の手で監禁されてしまう。ようやく戦いが終わり、ルーデンツは仲間とともにやっとのことでベルタのもとにたどりつく。けれども、この待ちに待った再会の場面で、彼がまっさ

きに抱擁したのはあれほど会いたがっていた恋人ではなかった。この決定的な瞬間に彼は、美しい恋人のかわりに、それまで絆を深めてきた男性の同志を固く抱きしめたのである。

青年ルーデンツの出自は貴族であり、抱きしめた相手とは本来大きな身分のへだたりがあった。それがともに戦いときにぶつかりあうなかで信頼が強められ、身分の差を乗り越えた友情と連帯が育まれたのである。ふたりの共闘の成果として勝ち取られたのは、ただ恋人との再会だけではなく「平等」の理念の文字通りの実現でもあったのであり、それゆえにこそふたりの絆は、恋人との関係性にはない特別な重みを持ったのだ。

シラーにとって男同士の愛は、「平等」の観念をもっとも純粋なかたちで具体化させる究極の関係性にほかならなかった。だからこそ、それは繰り返し主題化されるだけの重要性を持っていたのである。

## 2. 『マルタ騎士団』における官能的な「男同士の愛」とその機能

### 2. 1.

上でみたようにシラーにおいて男同士の関係性が特別なものだったとして、ではそれは『マルタ騎士団』のなかでどのような役割を与えられているのだろうか。

ここで、この作品の筋書きを追うことにしよう。

マルタ島はいままさにトルコの艦隊に包囲されている。すでにサン・エルモのとりではトルコ側に攻撃を加えられ、確実に包囲網もせばめられている。マルタの騎士団長ヴァレッタはトルコの総攻撃を予期し、準備に余念がなかった。頼みの綱はスペインから援軍だが、シシリア総督はトルコ海軍の勢力が衰えるまで待つかまえて、なかなか動こうとしない。トルコに攻められるたびに騎士たちの数も減り、騎士団は絶望的な雰囲気につつまれる。そんななかで騎士たちは団長に退避を求めるが、団長はこれを拒絶。団長は騎士たちに、ヒロイズムと犠牲的精神をもって戦い続けることを要求する。

しかしながら騎士たちのなかでは、すでに敬虔な宗教心もヒロイズムも失われていた。彼らは「精神的な（理想主義的な）感覚」を見失い、「世俗的（現実的）な感覚」に支配されて「愛や富、名誉欲、民族の誇りなどに動かされている」（158）のだ。騎士団内では捕虜の女性をめぐる争いも勃発し、剣が敵ではなく仲間に向けて抜かれるありさまである。そんな彼らと団長ヴァレッタとの溝は深く、騎士たちのあいだでは、団長への不満がいまにも爆発せんばかりに膨らんでゆく。

シラーは、こうして行き詰まった両者の間に和解がもたらされ、騎士たちが理想主義的な「高次のヒロイズム」（157）に目覚めてゆくさまを描こうとした。そしてこの目覚めと和解への契機として、ひとりの美しい騎士を登場させたのである。

その騎士の名はプリースト。彼本人は知らないが、じつはヴァレッタ若かりし頃の過ちの果実で、彼の血を分けた息子だった。ずばぬけた美貌の持ち主であると同時に、勇敢で真摯な騎士でもあり、多くの騎士たちがヴァレッタへの反感を強めるなか、ひそかにヴァレッタの志に共感する数少ないひとりである。ヴァレッタは、美と強さを併せ持つこの息子に言いようもなく深い愛を抱いていた。けれども団長という立場上、彼を特別扱いはできない。彼は父親としての気持ちを押し殺し、最愛の息子を絶望的な戦地に送る覚悟を決める。

やがてヴァレッタとプリーストとの親子関係が騎士たちの知るところとなる。そのとき、不可

能に思えた和解への転換が訪れる。秘められていた団長ヴァレッタの父親としての苦悩と、悲壮な決意を目の当たりにした騎士たちは、ヴァレッタの覚悟、そして毅然として死んでゆく美しいプリーストの姿にうたれて、自らも身を挺して戦うべく、団長のもとに結束するのである。

## 2. 2.

この犠牲とヒロイズムの物語に、「男同士の愛」はどのように交錯しているのだろうか。

まず、「男同士の愛」のモチーフをになっている騎士プリーストの像を詳しく見ておこう。彼は仲間の一人騎士クレクイと恋愛関係にあるという設定である。特徴的なのは、プリーストがこの恋愛の中で一貫して受動的な愛の対象として強調されているということだ。断片的な人物描写やメモ書きでは、クレクイの能動性がことさらに際立たせられており、クレクイがどれほど激しくプリーストを愛しているかということばかりが繰り返し語られている。それに対してプリーストの情熱についてはほとんど言及されない。クレクイの盲目的な情熱を、プリーストはもっぱら静かに受けとめるだけなのである。

プリーストの受動的な位置づけは、クレクイとの関係性にとどまらない。激しい情熱を呼び込み、男たちから思いをかけられるというのは、この作品世界全体のなかで騎士プリーストに与えられた役割ともなっているのだ。構想にはこうある。「サン・プリーストは美しい騎士であり、彼の美しさは彼に少女のような質を与えている。」(172) この「少女のような」というのは、たんに彼が女性のようななよやかさをそなえていることを意味しているのではないだろう。ここで思い起こされるのは、一八世紀後半に流行した市民悲劇の少女像である。市民悲劇では、父親の庇護下にあるうら若い少女が、しばしばたくらまずして男性の情熱に火をつけ激しい情念を向けられる。そして男性の飽くことのない追究にさらされたあげく、男性に身を任せることのないまま悲劇的な死を迎え、永遠に失われた光として悲嘆あふれる恋慕の対象となるのだ。レッシングの『エミーリア・ガロッチェ』(1772)で、女主人公がまったく無自覚に領主のよからぬ情念をかき立てたように、プリーストもまた「しばしば欲望を呼び込む」(172) 存在として設定されており、じっさいこの作品には、彼がひとりの悪役に期せずしてゆがんだ恋慕を向けられるエピソードも織り込まれている。そして劇の終盤では、すべての騎士たちの内に激しい感動を呼び起こし、自らの犠牲的な死によって彼らの悲痛な情念を一身に集めることになるのだ。市民悲劇の少女たちと同じように、美しいプリーストには、ただそこにいてだけで男たちの情熱を呼びおこす、受動的な愛の対象という役回りが割り当てられている。彼は男たちの心に火をともし触媒であり、愛され欲せられ渴望されながらもけっして手の届かないところに静かにたたずむ、犯しがたい美の化身なのである。

もうひとつプリースト像に特徴的なのは、彼がなによりも官能的な愛の対象として描かれていることだ。シラーによれば、クレクイがプリーストに向ける情熱は「本物の性的な愛である。それは彼がこまごまと優しく心配したり、嫉妬に燃えたり、対象の容姿を官能的に賛美したり、その他官能的なさまざまな徴候によって表現されることになる。」(173) また次のようにもある。

彼らの愛はもっとも純粋な美であるが、そこから、彼らを自然につなぎ止めている官能的な性格がそぎ落とされてはならない。それが性的な愛の形をかえた姿であり、その代用品であり、自然な衝動の働きであることは、感じられてよいし、また感じられるべきである。(172)

この愛の「官能性」はそれ自体きわめて抽象的で美的な次元でとらえられており、シラーはこれを「すべての生と、すべての創造の条件となるような、もっとも高次の、またもっとも純粋な意味合いにおいてである」（172）としている。そしてシラーによれば、まさにこのような抽象化された男同士の性愛、すなわち身体的な衝動をも巻き込んで否応なく騎士をとらえつつ、それ自体は「美」のもたらず陶醉に限りなく近いような愛こそが、この作品の展開上重要だったのだという。彼はこう書いている。

二人の騎士の愛は性的な愛のすべての兆候を備えていなければならない。この愛は、まさにこうした性格によって中心的なあらすじに結びついているのでなくてはならない。（172 f.）

では、プリーストへの官能的な愛と「中心的なあらすじ」とはいったいどのようにして結びついているのだろうか。

ここで、いま一度『マルタ騎士団』のすじがきを検討してみたい。それは絶望的な戦いのなかでばらばらになった騎士たちが、「高次のヒロイズム」に目覚めて団長ヴァレッタのもとに結束するというものであった。

しかし、このような「犠牲」の肯定は、先に見た理想主義者としてのシラー像といったもののようにおりあうのだろう。無謀な戦いに命をかけるという団長の要求は、いかなる理由があろうとも、「非人間的」とのそしりをまぬがれえない。すでに従来の研究の中でもこの問題は指摘されており、シラーについて二巻本のハンドブックを出したアルトも次のように述べている。「シラーが完成させた劇作品の中で、個人の生の利害を押し殺して支配的な原則に従うということを、この作品ほどに厳しく要請しているものはない。」<sup>(20)</sup>

アルトは、そのような「厳しさ」にシラー自身が問題を感じ、だからこそこの作品は結局完成されなかったのだととらえて、このモチーフ、また作者の『マルタ騎士団』への取り組み自体を軽視する立場をとった。けれども実際には、シラーは他の作品の執筆を続けながら繰り返し『マルタ騎士団』に舞い戻っているのであり、「英雄的な犠牲」というモチーフが彼にとってそう簡単に手放せない魅力を持っていたことは明らかである。同時に、彼がこのモチーフの難しさを自覚していたことも確かだ。彼はこの作品を成功させる鍵として、次のような点を挙げている。騎士たちが反抗的な態度を改めヴァレッタに従う過程は、絶対に「内面にうながされたもの」として描かれなければならない。さらに、「厳格な義務による犠牲を自発的な、愛と感激とともに遂行されるものへと変化させ」なければならない。（186）つまり彼はここで、「犠牲」の行為を、暴力や強制によらない完全に自発的な、人間の自由意志をそこなわないものとして描くことを試みたのだ。服従と犠牲の原動力を「義務」から「愛と感激」へと移すこと、すなわちこの行為を、意識化され理性に統制された次元から、より無意識的に人を動かす「感激」の次元に移すこと。それによってシラーは、騎士たちの変化を真に内発的なものとして提示し、彼らの「服従」を「自由」と調和させて、「犠牲」から非人間的な色を払拭しようとしたのだ。『マルタ騎士団』とは、「人間性」を追求しつつ「全体のための犠牲」の観念にもひかれていたシラーが、両者を調和させ、「自由」の理想を「自由」とは対局にある「犠牲」のドラマを通して顕現させようとした、きわめて困難な試みだったといえる。そして以下で見るように、「男同士の愛」のモチーフも、結局は実らなかったこの試みに取り組むなかでこそ浮上したのだと思われる。



### 2. 3.

騎士たちの「犠牲」を完全に自発的なものに転換する、そのための手続きとしてシラーが取り入れたのは、ヴァレッタとプリーストとの隠された親子関係をめぐるエピソードであった。メモ書きにはこう記されている。

全体の支軸は、ヴァレッタが、自ら遂行する厳格な法のために彼の息子を犠牲にし、誰よりも痛みを苦しむということである。(171)

騎士団のために父親としての愛を押し殺して、人知れず苦悩する——この感傷的なエピソードによって、『マルタ騎士団』では次のような効果を生みだすことがもくろまれている。

彼（＝ヴァレッタ）が恣意的で強情で、偏っているのではないかという騎士たちの疑いは一瞬にして晴れ、彼の父親らしい考えや正当性、善意、高次の徳が見えてくる。同時に、騎士たちの熱狂に火がつき、心を動かされて感激に満ちた服従が生まれる。(170)

つまりシラーは、騎士たちがヴァレッタの「父親としての苦しみ」を目の当たりにすることによって激しい同情をかきたてられ、この「同情」がてことなると「感激に満ちた」自発的な服従が生まれる、という流れを考えたのである。

しかし本当に「受苦の父親」という感傷的なエピソードだけで、服従の行為を「義務」から「感激と愛」の次元に移すことができるのだろうか。ヴァレッタの父親としての自己犠牲が、いかにこの団長をたんなる畏敬の対象から同情の対象に変化させ、哀れむべき存在にすることでその「権力者」としてのイメージを払拭するのだとしても、彼が騎士たちに自己犠牲を要求し、騎士たちがこれに従うという構造は、依然として残される。

これについては、すでに従来の研究でも次のような問題点が指摘されている。ヴァレッタはプリーストの父親であるのみではなく、騎士団全体にとっても父親的な役割を果たしている。そのようにヴァレッタと団員たちとの関係性が「親子」に重ねられるものである以上、「子」たる騎士たちの服従はけっして完全に自由な個人の行為とはならないだろう。「現実に父がいて、彼の掟の力がある」かぎり、騎士たちは不可避免的に「個人として自立できない構造」にからめとられているのだから。<sup>(21)</sup>

まさにこのような問題を克服するためにこそ、シラーは、父と子をめぐる「中心的なあらずじ」の中に、「男同士の愛」のモチーフを交錯させたのではないだろうか。つまり、心と体のすべてを巻き込んで男たちを惹き付ける美しい騎士プリーストは、あくまでも自由で自発的な「目覚め」を導き出すにあたって、「父親の犠牲」という感傷的なエピソードだけでは乗り越えきれない部分を補うためにこそ、存在していると思われる。

すなわちこの作品のなかで「男同士の愛」は、「親子愛」のプロットを二重の意味で補強しているのだ。まずそれは、本質的に対等な関係性にある騎士どうしの愛であり、先に見たようにいかなるヒエラルヒー構造からも自由な、「平等」の理想をそのまま溶かし込みうる愛である。騎士たちが自らを犠牲に向かわせる名状しがたい「感激」にとらえられてゆく、その過程に、ただ「父親」的な存在への「子ども」としての思慕だけではなく、対等で「平等」な対象への愛が織り込まれるならば、彼らの激情は、「厳格な義務」とは完全に無縁の、真に「内面

からうながされた」自由な感情のほとぼしりとしてより明確に示されることになる。そのような感情のほとぼしりを喚起し、喚起しつつこれを一身に受けとめる者として、「少女のような騎士プリーストは存在しているのだ。

さらにプリーストの呼び起こす愛は、それが官能的に彩られている点でも、「感激」の内発性をたしかに補強するものであろう。すでに述べてきたように、「受苦の父親」の物語によって騎士たちに喚起されるのは感傷的な「同情」である。同情もまた本来、人の心を根底からゆさぶる強い激情でありうるのかもしれない。けれども啓蒙の時代においてこの「同情」は、人間社会の道徳性の基盤とも見なされ、感傷主義的な道徳の秩序に深く組み込まれていたのだった。<sup>(22)</sup>「同情心の強い人間がもっとも良い人間なのです」<sup>(23)</sup> — レッシングのこの言葉に端的にあらわれているように、「同情」は当時の市民道徳のなかで要ともいえる役割を与えられており、その意味であまりにも道徳化され、また市民道徳を介してあまりにも現世と結びついた感情であった。それに対して、クレクイとの関係性を通して官能的な愛の対象として強調されたプリーストの「犠牲」は、たんなる同情ではなく、官能性を帯びた哀惜の念を呼び起こす。しかも先に見たようにこの作品の中で彼の喚起する官能的な愛は、「すべての生と、すべての創造の条件となるような」「自然の衝動」と規定されていたのだ。つまりそれは、現世的な道徳や理性的判断の網の目からはこぼれおちてしまう、身体と無意識の領域を包摂する真に内的な衝動として位置づけられている。じっさい彼の恋人クレクイは、しばしばプリーストへの激しすぎる愛のためにすべての理性的な判断力を失い、愛に突き動かされて危険な行動に走ろうとさえしている。つまりここではプリーストの持つ官能的な魅惑が、世俗の規範の枠組みをも踏み越えて人間をとらえる絶対的な力として強調されているのだ。だからこその愛は、騎士たちが「世俗的（現実的）な感覚」からぬけだして「精神的な（理想主義的な）感覚」に到達し、現世的な価値判断の彼岸にある「高次のヒロイズム」にいたるための契機ともなりうるのである。「天使のように立派に気高く犠牲者となる」（171）プリーストの姿に騎士たちが涙し、またエロスの恋慕をかきたてられるとき、騎士たちは愛の対象への同一化へと自然にいざなわれ、外的な強制の力を感じることなく、自由な個人としての存在形態を失わないままに、自己犠牲へと導かれるのである。

『マルタ騎士団』の中でシラーは、愛のひとつの理想形として騎士たちの間の官能的な愛を描こうとした。そしてこの愛、身体という「自然」をも巻き込みつつ現世的なものをすでに超え出、「平等」の理想を表現する唯一究極の関係性としての「男同士の愛」を、「高次のヒロイズム」を「人間的」に誘い出すためのいまひとつの動力にしようとしたのだった。この作品におけるエロスの対象としての男性は、「自分をより高次の全体性の犠牲にする」という行為から、強制や屈従の色をとりさって純粹に自発的な形態を与えるために、不可欠の意味を持っていたのである。

## 終わりに

すでにふれたように、シラー研究のなかでも断片『マルタ騎士団』はきわめてマイナーな作品である。けれどもこれが文学研究の領域を超え出て特別な関心を呼び起こしたこともあった。それは二十世紀の初頭、近代化の過程では一八世紀後半の友情礼賛以降二回目に、男同士の親密な関係性に関心が集められた時代のことである。

一八世紀の友情礼賛が、封建的な秩序に対抗して新しい「人間的な」関係性を打ち出そうとする市民知識層の文化戦略の一端であり、その意味で市民社会の夜明けということと密接に結びついていたのに対して、この時代の「男同士の絆」は、世紀末に高められた文明批判に根ざした現象で、爛熟した市民社会にすでに黄昏が見えはじめたことと深くかかわっていた。一九世紀末になると、親の世代が築いた都市文明に対する若者らの違和感にうながされて、ワンダーフォーゲルをはじめとするドイツ青年運動が活発化する。そこで集団の結束の要となったのは、なによりも少年どうしの強い情緒的な絆だった。山歩きやキャンプ・ファイヤーを通して深められる仲間との絆をよりどころに、少年たちは「虚偽」に満ちた近代社会の現状から離れ、その「墮落」から距離をとろうとしたのである。二十世紀に入ると、そうした近代批判を土台とする男性間の感情的な結束を、政治的な結合の動力として積極的に理論化しようとする試みが登場する。<sup>(24)</sup> その急先鋒であったハンス・ブリュアーは、主著『男性同盟における性愛の役割』（1917/19）の中で、男性同士のエロスのな引力によって成り立つ共同体、すなわち「男性同盟」の観念を打ち出した。彼は市民的な結婚のあり方を欺瞞の温床としてとらえたうえで「男性同盟」を結婚よりもずっと優れていると見なし、新しい時代の創造的な力の源として、その文化的また政治的な意義をこう主張したのだった。「人間が家庭しか形成しないとすれば、人間は種の保存以外のことを達成しえないであろう。国家の形成は人間の社会形成能力の第二の極が動員されてはじめて可能となる。この第二の極とは男性共同体である。」<sup>(25)</sup>

同じ本のなかで彼はシラーの『マルタ騎士団』を高く評価している。ブリュアーはシラーが男性的なものを追究した希有な作家であり、男たちの共同体への思いがきわめて強かったことを指摘し、『マルタ騎士団』はこの思いを「悲劇」の形式に昇華させようとする真摯な取り組みにほかならないとした。そしてこの作品にこそ作者の「真の本質がさらけだされている」<sup>(26)</sup> ととらえ、文学史上とうに忘れ去られていたこの断片を、もしも完成していたならば「シラーの最高の作品になりえたとさえ言える」<sup>(27)</sup> と絶賛したのだった。

政治的な結束の力として男同士のエロスの情熱に期待を寄せたブリュアーが、シラーとその『マルタ騎士団』に注目したのは当然のことでもあっただろう。ブリュアーはその男性同盟論において、男性共同体のモデルとして「第一等」と「第二等」のふたつを掲げている。「第一等」の場合、性的引力をもって共同体に君臨するカリスマ的な「男性英雄」が存在し、その周りに彼との性的な親密さの度合いに応じて幾重にも輪が出来てゆくかたちで共同体が構成される。それに対して「第二等」の共同体は、より現実社会の実態にそくして構想されており、男性たちは通常女性と関係を持ち、その一方で男性同士の性愛は無意識的なかたちで残される。この共同体ではカリスマ的「男性英雄」は実際には存在しないが、同性に向けられる男たちの無意識的な欲動をたばねる象徴的な存在として、権威ある「英雄の像」が掲げられることになる。<sup>(28)</sup> このようにブリュアーの議論では、顕在的にしろ潜在的にしろカリスマ的な「男性英雄」が想定されており、この「英雄」に流れ込むエロスの情動こそが「男性同盟」の絆を生み出すとされる。それは『マルタ騎士団』に見られた構図、すなわち「プリースト」というひとりのエロスの対象に男たちの情念を集め、それによって集団への自己溶解をうながそうとするという構図とも、たしかに重なっているだろう。

けれども——これはブリュアーにおいて完全に見過ごされているのだが——じつは両者の間に大きなちがいがあったことも無視してはなるまい。すなわち『マルタ騎士団』のなかで男たちの情熱をたばねるプリーストは、けっして権力を持つ「英雄」ではないのだ。彼はあくま

でも権力者の美しい「息子」であり、他の騎士たちとは「友」という平等な関係性にある。つまりここで男性間のエロスは、ヒエラルヒー的ではなく、あくまでも水平に作用している。ブリューアーの議論が、「英雄」というひとりの権力者にエロスの中心をゆだねており、その意味で権力をエロス化するものにほかならないのに対して、シラーは「権力」そのものに「エロス」を重ねることはなかったのである。<sup>(29)</sup>

もちろんだからといって、「英雄的な犠牲」というモチーフそのものの問題性が克服されているわけではない。スーザン・ソントグは、潜在的に支配と隷属を正当化する論理をはらむ表現様式を広く「ファシスト美学」と呼び、その論理が持つ性的な魅惑が強調されるとき、これを「ファシズムのエロス化」と呼んだ。<sup>(30)</sup> シラーの『マルタ騎士団』もまた、「屈服を榮譽とし、無私を称揚し、死を美化する」<sup>(31)</sup> 点で、やはりこの「ファシスト美学」ともけっして無縁ではないところにある。それは「権力のエロス化」を避ける一方、「犠牲」の魅惑を確かに織り込んだ「犠牲のエロス化」にほかならないのだ。ただシラーの場合、この魅惑そのものに一定のかたちを与えることで、これを浄化させようとしているようにも思われる。つまり彼は、「犠牲」におけるエロスの情動に水平に働く「男同士の愛」というかたちを付与し、それによって、通常この権威主義的な「美学」と否応なく結びつくエロスのかたち、すなわちサディズムとマゾヒズムの快樂とはあらかじめ手を切ろうとしているようにも見えるのだ。

権力者の命に従い自己を犠牲にするということが、真に「自由」に——つまり権威構造そのものが発散する魅惑にも取り込まれないかたちで——なされうるのは、犠牲のエロスを担う「男同士の愛」が、いかなる権威関係とも無縁の「水平な」ものとして想定されているからこそであった。逆に言うならば、シラーにおける「男同士の愛」は、完全に自由な関係性として存在しているからこそ、「自由と平等」を掲げるシラーの理想主義的な空間のなかに、「支配と隷属」の構造が入り込むことをゆるす契機ともなっている。それはもっとも平等な関係性であるからこそ、犠牲のエロスをも無害に見せてしまうのだ。『マルタ騎士団』における「男同士の愛」は、「平等」の理想が抱える逆説を、痛烈に浮かび上がらせている。

## 注

- (1) テキストは以下を使用。引用にあたっては頁数のみを示す。Friedrich Schiller: Die Maltesser. In: *Sämtliche Werke in 5 Bänden*. Auf der Grundlage der Textedition von Herbert G. Göpfert herausgegeben von Peter-André Alt, Albert Meier und Wolfgang Riedel. Bd. 3, Fragmente, Übersetzungen, Bearbeitungen. Hrsg. von Jörg Robert und Albert Meier. München 2004, S. 155-189.
- (2) Vgl. *Sämtliche Werke*, Bd. 3, S. 938-964.
- (3) Ebd. S. 941.
- (4) 次の研究ではこの作品における男同士の愛が、たんに騎士たちの道徳的墮落の一例を表現したものであるということで片付けられている。Peter-André Alt: *Schiller. Eine Biographie*. Bd. 2, 1791-1805. München 2000, S. 467. またこの断片について新しく出された以下の単著でも、男同士の愛のモチーフについてはふれられていない。Peter Selg: *Die Reinheit des Ordens und das Opfer. Friedrich Schillers Johanniter-Fragment "Die Maltesser"*. Hamburg 2010.
- (5) *Sämtliche Werke*, Bd. 2, S. 195.
- (6) *Sämtliche Werke*, Bd. 1, S. 355.
- (7) Ebd. S. 356.
- (8) Ebd.

- (9) Jürgen Habermas: *Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft: mit einem Vorwort zur Neuauflage* 1990. Frankfurt a. M. 1990, S. 107-115. (ユルゲン・ハーバーマス (細谷貞雄、山田正行訳): 『公共性の構造転換 — 市民社会の一カテゴリーについての研究』、1994年。)
- (10) Vgl. Bengt Algot Sørensen: *Herrschaft und Zärtlichkeit. Der Patriarchalismus und das Drama im 18. Jahrhundert*. München 1984.
- (11) 一八世紀ドイツにおける恋愛観の変化については以下を参照。Niklas Luhmann: *Liebe als Passion. Zur Codierung von Intimität*. Frankfurt a. M. 1982; Jutta Greis: *Drama Liebe. Zur Entstehungsgeschichte der modernen Liebe im Drama des 18. Jahrhunderts*. Stuttgart 1991.
- (12) Habermas 1990, S. 111.
- (13) 一八世紀ドイツにおける「友情礼賛」については以下を参照。Jost Hermand: *Freundschaft. Zur Geschichte einer sozialen Bindung*. Köln 2006; Eckhardt Meyer-Krentler: *Der Bürger als Freund. Ein sozialetisches Programm und seine Kritik in der neuern deutschen Erzählliteratur*. München 1984; Wolfram Mauser u. Barbara Becker-Cantarino (Hrsg.): *Frauenfreundschaft-Männerfreundschaft. Literarische Diskurse im 18. Jahrhundert*. Tübingen 1991.
- (14) Vgl. Joachim Pfeiffer: Männerfreundschaften in der Literatur des 18. Jahrhunderts. In: *Freiburger Frauenstudien* 6, 2000, S. 193-210.
- (15) 谷口栄一: 「1750-1850年のドイツにおける友情礼賛と同性愛」、『独仏文学』第34号所収、大阪府立大学独仏文学研究会、2000年、111-127頁。
- (16) *Sämtliche Werke*, Bd. 1, S. 765.
- (17) Bengt Algot Sørensen: „Freundschaft und Patriarchat im 18. Jahrhundert.“ In: Mauser u. Becker-Cantarino (Hrsg.) 1991, S. 279-292, hier S. 281 f.
- (18) Immanuel Kant. *Werke in sechs Bänden*. Darmstadt 1956, Bd. IV, S. 608-613.
- (19) Vgl. Sørensen 1984, S. 44.
- (20) Alt 2000, S. 468.
- (21) *Sämtliche Werke*, Bd. 3, S. 945.
- (22) Vgl. Gerhard Sauder: *Empfindsamkeit. Bd. 1. Voraussetzungen und Elemente*. Stuttgart 1974.
- (23) Gotthold Ephraim Lessing; Moses Mendelssohn; Friedrich Nicolai: *Briefwechsel über das Trauerspiel*. Hrsg. von Jochen Schulte-Sasse. München 1972, S. 55.
- (24) 少年たちが絆を深めたワンダーフォーゲルの時代は、男性同士の性愛の位置づけにかんして、さまざまに揺れ動いた時代であった。二十世紀に入ると、一九世紀末に導入された「ホモセクシュアル」という言葉のもとに男性間の同性愛を病理化しつつ、これを政治的、社会的に危険な現象として糾弾する声が高められてゆく。その一方で、この性愛にもっとポジティブな意味付けを与えようとする動きも生まれた。「男性同盟」礼賛の風潮は、このようなせめぎ合いの中で生まれたものである。この時代の男同士の愛をめぐる言説については、以下を参照。Ulrike Brunotte: *Zwischen Eros und Krieg. Männerbund und Ritual in der Moderne*. Berlin (o. J.); Susanne zur Nieden (Hrsg.): *Homosexualität und Staatsräson. Männlichkeit, Homophobie und Politik in Deutschland 1900-1945*. Frankfurt 2005; Claudia Bruns: *Politik des Eros. Der Männerbund in Wissenschaft, Politik und Jugendkultur (1880-1934)*. Köln; Weimar; Wien 2008; 福元圭太: 『「青年の国」ドイツとトーマス・マン — 20世紀初頭のドイツにおける男性同盟と同性愛 —』、2005年、九州大学出版会。
- (25) Hans Blüher: *Die Rolle der Erotik in der männlichen Gesellschaft. Eine Theorie der menschlichen Staatsbildung nach Wesen und Wert*. Neuausgabe besorgt von Prof. Hans Joachim Schoeps. Stuttgart 1962, S. 238.
- (26) Ebd. S. 300.
- (27) Ebd. S. 298.
- (28) Ebd. S. 246-250.
- (29) もうひとつのちがいは、「女性」ないし「女性的なもの」の位置づけであろう。ブリュエアーの「男

性同盟」礼賛はミソジニーと表裏一体であった。ブリューアーもふくめこの時代のミソジニーの特徴は、たんに「女性」が排除されるというより、「女性的なもの」それ自体が近代化の墮落と重ねられ、近代批判の文脈の中で否定的なまなざしを向けられたことである。「女性的なもの」の排除という点で、男性間のエロスを肯定するブリューアーの言説は、一見逆の主張、つまりホモフォビアの言説とも共通していた。すなわち二十世紀初頭において男性間の同性愛は、もっぱらそれが男性の（ひいては社会の）「女性化」をまねくという観点から問題視されたのである。そうした構図とはことなり、シラーの男性共同体においては、プリーストの「少女」という位置づけから明らかなように、「女性的なもの」そのものが排除されているわけではない。

- (30) スーザン・ソントグ：「ファシズムの魅力」、『土星の徴しの下に』（富山太佳夫訳）、みすず書房、2007年所収。81-117頁。
- (31) 同上、9頁。